

岩手県野田村の支援活動報告（2011年11月5日）

— 野田村・弘前市交流登山会 in 2011 —

前日の夜まで天気が心配されたが、皆の気持ちを通じたか快晴に恵まれた。チーム・オール弘前の一年間の活動を総括する交流登山会。企画の段階からいろいろあったが、無事当日の朝を迎えた。活動開始以来初めて、弘前から3台の大型バスを出すことになった。弘前からの参加者は、学生80名、市民16名、教員2名の計98名と、活動開始以来最大の参加者となった。また、交流登山会では森の中のミニコンサートを企画しており、ボランティアで参加してくださったシンガーソングライターの「たいぞう」さんと弘前大学津軽三味線サークルの10名のメンバーが参加してくれた。

事務局は、教員2名と学生事務局3名で、3台の車に分かれて搭乗した。行きの車内では、恒例の自己紹介と一年間の簡単な感想をうかがった。私が搭乗していた一号車では、4月から継続して参加している顔なじみのメンバーが多く、一年間をしみじみと語ってくださっていた。自己紹介の後、今までの活動経緯や活動内容、そして野田村の状況などについての説明を事務局から行った。

野田村に着いたのは、予定通りの10時30分だった。野田村の役場前の「のんちゃん広場」には既に野田村からの参加者35名がバスを出迎えてくれた。現地での物資の調達などを担当してくださった久慈広域観光協会の貫牛さんとチーム北リアスの渥美先生の顔も見えた。また、野田村の参加者の中には、我々をいつも温かく迎えてくださる顔なじみの方々の顔があった。素直にうれしい。

野田村の参加者が3台のバスに分かれて乗って、その日登山する、わさらび山の登山口へと向かった。バスの中では、野田村の方の自己紹介と和佐羅比山の説明を貫牛さんがしてくださった。頂上に一等三角点がある一級山で、海拔800mだという。岩木山の半分の高さで、岩木山の登山経験のある市民からは、ちょうどいい軽いハイキングになりそうだと自信満々の声が聞こえた。



道の駅おりつめで集合写真



貫牛さんから和佐羅比山について



出発進行



今から心臓破りの坂へ

20分ほど移動して登山口に到着した。入口から昼食会場となっている場所までは約6kmほどある。最初少し傾斜のきつい斜面を登り始めた。最前列を貫牛さんが引率し、その次に今回の登山会を当初企画してくださった土岐先生の(有)エコ・遊のプロの登山ガイドのメンバが無線などの装備を備えて、ガイドしてくださった。140名近くの大軍団が無事に山頂まで登るためには、プロの力が何より重要である。心強い。

最初から意外と斜面がきつく、何人かが少し遅れ始めた。私は最後尾で、ペースが落ちているみんなに声をかけながら、登山ガイドの相馬さんとペースをコントロールしていた。1kmを登ったところで、一旦休憩。参加者から少し溜息が漏れ始めた。先頭の貫牛さんからは、今から心臓破りの坂が続きますよとげきが飛んだ。えー、こんな坂がまだまだ続くの(涙)?日頃鍛えているつもりでいたが少しつらい。しかし、心配していた学生諸君は三々五々、おしゃべりを楽しみながら元気いっぱい歩いていた。また、野田村の皆さんを気遣って、「お荷物もちますか」、「大丈夫ですか」などと声をかけはじめていた。素晴らしい。本当に声をかけられるかと心配したが、意外と今の若者はやればできる。頼もしい。

長い行列のあちらこちらで、野田村の皆さんとおしゃべりをしたり、お荷物をもってあ



ようやくお昼に、おにぎり2個とトン汁



弘前大学津軽三味線サークル



中小企業応援隊 たいそうさん

げたりと、一緒に歩くということが実感できる雰囲気になってきた。心臓破りの坂の後は、緩やかな道がいつまでも続いていた。もうすでにお昼の時間を過ぎていた。あちこちで「お腹がすいた」「まだですか？」の声が聞こえ始めた。その瞬間、後ろから軽ワゴン車一台は上ってきた。後部座席にはお弁当らしいものが・・・。

ようやくお昼の場所に着いたのは、午後1時を回った頃だった。えぼし荘で準備してくださったおにぎり2個と豚汁。何とも言えない美味しさだった。いっきに豚汁を飲み干し、お代わり！涙が出るほどおいしかった。

お腹が満たされた所で、森の中のコンサートが開かれた。6キロの山道を重たい三味線をもって登ってくれた弘大三味線クラブの皆さんの演奏から始まった。落葉の晩秋の雑木林の中で、津軽三味線の乾いた音色が響いていた。何とも言えない幻想的な風景に、参加者一同は心を奪われていた。リンゴ節を含む4曲の演奏の後、RABラジオで中小企業応援隊を担当しているシンガーソングライター「たいぞう」さんのミニライブが行われた。ユーモアに富んだお話とギターの軽やかな音色でみんなの気持ちも軽くなった。野田村の住民の皆さんの顔にも笑顔が溢れていた。



みんなで「上を向いて歩こう」の合唱



和佐羅比山の山頂

最後は、交流登山会を企画した土岐先生のかげ声で、みんなで「上を向いて歩こう」を歌った。今まで一緒に歩いてきた。今からもみんなで手を繋いで一緒に歩いて行こう。そんな願いを込めて、「上を向いて歩こう」を合唱した。素晴らしいコンサートだった。忘れられない一時になった。

コンサートの後は大変だった。もうすでに時計は2時をはるかに過ぎていた。このままでは全員が山頂まで登れない。足の調子が悪かった土岐先生と疲れ気味の皆さんをお昼の場所に残して、山頂まで一気に上った。このままでは、日が暮れるまでに降りられないと、疲れた体に鞭を打って、最後尾から「このままでは山頂まで登れないよ」と声をかけながら登った。およそ30分後ようやく山頂に到着した。

山頂から美しい海と山々に囲まれている野田村の景色が一目に入った。久慈から続く突起している丘と玉川地区の山に囲まれ、凹になっている野田村の姿が見えた。津波さえなければ、山々に囲まれた見事なリアス式海岸である。

野田村はがれきが完全に撤去され、更地となり、塩害を受けたにも関わらず草草がよく育ち、緑豊かな土地に見えた。震災前には、雑草が茂っている野田村が、たくさんの家々と黄金の色に輝く稲が揺らいていたと思うと、近い将来もう一度、和佐羅比山に登って黄金に輝く野田村を見てみたいと強く思った。最後のメンバーが山頂に到着したことを見計

らって、みんなで野田村の一日にも早い復興を願って万歳三唱をした。気持ちイイ。

予想よりも早く山頂まで辿り着いたと安心したのもつかの間、西から空が暗くなり始めていた。山頂で達成感に浸っている皆に、「降りるよ」と尻を叩く。皆で再度山頂に立つことを誓い合って、山を降りはじめた。順序に進むかなと思った矢先に、足の不調を訴える学生が現れた。無理もない。日頃鍛えているつもりの方にとってもきついのに、往復18キロの道のりは日頃あまり運動していない学生諸君にとって無茶な試みだったかも知れない。

他のガイドさんを前に送って、相馬さんと負傷者と一緒に、山の中腹に残った。あっという間に周囲は暗くなり、ライトがないと歩けないぐらいになってしまった。迎えの車を待ちながらも先発隊が気になる。無線連絡では周囲は真っ暗になっているのに、まだ誰もバスまで辿り着いていないようだった。不安な予感が頭をよぎる。しばらくすると、迎えの車が見えた。

軽トラックの荷台に、負傷者と一緒に乗り込んで山を下りた。想像以上に遠い道なりに、不安と不吉な予感がする。残り400メートル位の所で、子供の泣き声が聞こえた。不安は的中。初めて野田村に連れてきたわが娘たちが不安で、泣き叫んでいた。真っ暗の山の中、父親の顔も見えず、それぞればらばらになって、不安いっぱいだったに違いない。何とか泣き叫んでいる子供を軽トラックの荷台に乗せて、山を下りた。

真っ暗な中での下山だったにも関わらず、幸いなことに我が子が泣き叫んだ以外には、誰一人けがすることなく、下山することができた。時計はもうすでに5時を過ぎていて、計画の甘さで、多くの方にご心配をかけてしまった。本当に申し訳なく思う。

慌ただしく野田村の皆さんを役場の前までお送りして、急いで帰路についた。帰りのバスの中の感想では、「きつかったけど忘れられない思い出ができた」「楽しかった」という声が意外に多かった。「野田村の皆さんと一緒に笑顔で山頂に登れたことが忘れられない。新しい一ページが開かれたと感じた。」「一つの区切りができた。新しい気持ちで野田にきたい」「弘大の学生の親切さに感心した」という嬉しい声が多く聞こえた。もちろん中には、計画が甘かったのではという指摘もあった。何より企画を担当したものとして、深く反省している。二度と今回のようなことのないように注意したい。そして、来年の春は野田村の皆さんと一緒に、岩木山の山頂で万歳三唱をしたいと強く思った。

最後に、4月から本日の最後の交流登山会まで大きなけがや問題もなく無事に終えたことを、何より有り難く思います。今までご支援くださった皆さん、参加者の皆さん、そして野田村の皆さん、本当にありがとうございました。

李永俊